

Title	回想そしてこれからへの想像
Author(s)	加地, 伸行
Citation	中国研究集刊. 2015, 61, p. 1-5
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/58634
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

〔巻頭言〕

回想そしてこれからへの想像

加地 伸行

本誌が第六十一号とのこと、大驚した。創刊者として、これ以上の感激はない。

雑誌を創刊しても、世に言う三号雑誌となるのが大半である。いや、三号で廃刊は口惜しいので、休刊と称したり、あるいは黙りこんでしまっていたりして、いったいどうなっているのか分からない雑誌もかなりある。

本誌創刊の事情等については、本誌秋号（第二十二号）において述べているので参看されたい。

ただ、書き残したかもしれないので、思い出すままに、いくつかについて述べたい。

本誌は、『千字文』の排列字を号数としている。その大きな理由は、後発であることを韜晦するため、いや、ありていに言えば、誤魔化すためであった。

大阪大学の理系はともかく、文系は新興であるため、

雑誌を創っても、とにかく「一号」から始めなければならぬのが、癪だった。新興だからしかたがないと言え、それまでだが、負けず嫌いの老生、今風いまふうに言えば、かつこ良くゆきたかった。それにナンバーということであるならば、甲・乙・丙……もある。和風なら、い・ろ・は・に……もある。と言うことで、実は、はじめ、干支でゆこうかとも思った。しかし、すぐそれは省いた。新興であるので、速度を与えて号数を増やすために、実は年に二回の刊行をと考えていた。すると、干支であるのと、同一年で二冊の号称では、その処理が難しい。その上、干支だと還暦で六十一号が、一号と同じ干支になってしまう。すると六十号で打ち留めとなる。これだめ。というようなことがあって、『千字文』に乗ることになったのである。

会費については、あえて安くして五百円とした。その大きな理由は、これもまた新興大学の文系の悲しき、卒業生が少なく、卒業生中心の会費では、初めから行きづまることが目に見えていた。多くの学術誌の会員制の実態は、会計の苦勞なしには語れない。そこであえて安く形式的会費とした。それは、会費に頼らないという覚悟を示したのである。

そこで、家人の名義、すなわち加地芳子が加地伸行に奨学寄付金を提供する形式を取り、委任経理金として大学に預け、それに由って、雑誌刊行をしたのである。要は、私が自腹を切ったということ。この奨学寄付金は、その後、拡大していったが、あるときにストップした。その最大理由は、平成五年、日本中国学会大会を大阪大学が担当したとき、諸企業から寄付をいただき、精算後、約百万円が余った。それで当分、雑誌刊行ができる計算となったからである。

学会の大会運営は、この寄附金でゆつたり運営ができた。例えば、会場は吹田市民文化会館であり、阪急の吹田駅すぐ前となるが、JRなら歩いて十五分かかる。そこでJR駅前からは、阪急タクシーを相乗りで無料利用できるように手配して便宜を図った。もちろん、タクシー料金は当方持ちだったが、問題でない。

その大会に出席された方は御記憶かと思うが、大会の両日の昼食時、ビールを無料で提供した。アサヒビール社に寄附のお願いに参上したとき、現金は出せないがビールならいくらでも出すとおっしゃられたので、その御芳志により、無料提供できたのである。大会閉会後、余ったビールは、懇親会会場の高級フランス料理店が、すべて引きとって下さった。これは実は、阪急電鉄の知人重役の御高配で、その引き取り代金を懇親会費から引いて下さったのである。ありがたかった。もちろん、懇親会そのものにおいてもビールはアサヒビールの提供だったので、そのビール代金はゼロだった。

タクシーと言えば、吹田の会場から、大阪・梅田の懇親会場まで、役員や老先生たちにどんどん乗っていた。もちろん無料。十台準備したので、約四十人は乗車されたと思う。

懇親会費は、通常の学会懇親会と同額にしたが、なにしろ大阪の梅田という一等地の高級レストランだったので、当然、料金は高額。その差額は当方持ちとなった。しかし、阪急資本系の店だったので、前記重役のお口添えで、まずは安くしていただき助かった。

実は驚いたことがあった。懇親会の乾杯後から、会場入口に見知らぬ方が立っておられ、ずーっと、ほぼ散会

近くまで見ておられた。老生、近づいて話しかけたところ、閉会后、老生に挨拶する予定だったとのこと。驚いてたずねると、そのレストランの支配人だった。会において店側に粗相がないようにと、店の運営を指揮しておられたわけであった。いや、恐縮した。同店総出のもてなしであった。それと言うのも、阪急の重役の威力に外ならなかった。

話が大きく横に外れてしまったが、今後の学会運営の参考のために、どのようにして資金を調達したのか、その方法を記しておく。

チンと坐っているのは、金は集まらない。当然、企業等を回ってお願ひする。その際、紹介状が必要。紹介状なしでは門前払いとなるのが当り前。

では、その紹介状とは、となる。これには各種の態様があるので一概に言えない。各人が関係を作るほかはない。しかし、本気になれば、組織できる。老生の場合、大阪の懷徳堂（江戸時代の漢学塾）を記念し活動する懷徳堂記念会（大阪大学が運営）を通じて、住友銀行（当時）や日本生命の総務部長・秘書室長らに参謀となつていただいた。

そのときに得た知識が生きた。企業を回って、ただ寄附集めしても、限界がある。その大きな理由は、企業が

学会開催に寄附しても、それは税金の控除とならないからである。

そこで、税金の控除対象となるものを検討した結果、「社員研修」が該当することを知った。すなわち、社員が研修会へ参加する形式（内容も）があればいいわけである。その研修費は、会社の負担となる。社員のためであるから。

そこで熟慮した結果、学会期間中に、学会の特別のプログラムを組んだ。すなわち第一部は陳舜臣氏の講演、それを受けての第二部はシンポジウム。

陳氏の講演料は、当時、百万円。しかし、私は、陳氏に率直に事情を申しあげ、車駕料二十万円でお許しいただいた。破格であり、ありがたかった。

シンポジウムでは、非学会員の島田慶次氏を柱に、女性では会員の井波律子氏をと布陣を厚くし、司会は河田悌一氏で、同氏にすべてを託した。

シンポジウムのテーマは「儒教と二十一世紀と」であり、当時、儒教文化圏の経済的發展が著しく世界的に注目されていたので、社員研修のテーマとしても妥当であった。

そういう企画で、一口つまりは一人の研修費を三万円とした。しかし、例えば、十口の三十万円を納めて下

さった企業の場合、参加者は必ずしも十人とは限らない。そこは、阿吽の呼吸である。結果、百五十口（四百五十万円）の研修費をいただいた。諸費用に使ったのは約三百五十万円であった。当時、学会本部から大会担当校への大会補助金は三十万円前後であった。貧乏学者はつつましく暮らしている。それだけに、学会員がせっかく全国から集まるのだから、二日間ぐらい、パーツと華やかにゆつたりと過ごしてもいいではないか。そして、寄附金が余れば、大会担当校の次の活力として使えるのではないか。企業人もバカではない。誠実にお願いと、応じてくださる。

と書いていると、いろいろなことを想い出す。前記の懇親会の件。アトラクションを考えた。フランス料理店であるから、シャンソン歌手に出演してもらおうと思った。大阪における実力派ナンバーワンの女性歌手と折衝に入ったが、出演料が高い。宝塚歌劇団の団員（トップではない）とも話に入ったが、シャンソンの実力がどの程度か分からない。ということで、流れてしまった。結局、大会定番、美声にして声量大の橋本高勝会員になったのではないかと記憶する。

話をもどす。本誌六十一号の今後についてであるが、例えば、こういう行きかたはどうであろうか。すなわ

ち、紙を使う雑誌ではなくて、ホームページ上の雑誌にする。

その利点は、①印刷・製本・配送の諸経費が不要となる。②会費徴収の手間が楽になる。③献本先の図書館・大学における、邪魔物扱いそして廃棄の運命となる雑誌をなくせる。④会員自身も書棚管理が楽になる。⑤発行後、学会本部において、在庫管理の必要がなくなる。⑥最大メリットは、全世界からアクセスしてくるので、本当の読者、すなわち本当に読む人を全世界的に得ることが出来る。⑦そして、発表物の校正等の技術的責任は、すべて発表者本人が負うことになる。

これからは、パソコンを使えない老生のような時代遅れの研究者の時代ではない。インターネットという新しい技術がふつうのそれとなっている時代であり、これはもう元へもどすことはできない。

それならそれで、そのように頭を切り換えていいのではなからうか。パソコンを使えない老生が言うのであるから、まちがいない。いささか悲しいが、「老兵は死なず、消え去るのみ」ということであろうか。呵呵。

最後に一言。これからの中国学研究者についてである。老生の近刊『中国学の散歩道——独り読む中国学入門』（研文出版・平成二十七年十月刊）の第九章「中国学

の野道」は、「中国学の過去・現在・未来」という副題を付している。名古屋大学と大阪大学との合同中国学研究会が定期的に行われているが、そこにおいて、以前、老生が講演したが、それを文字化したものである。

老生としては、これからの中国学研究者とりわけ若い研究者の苦しみは、察して余りある。しかし、絶望することはない。必ず生きてゆけるということを述べた内容である。

いつの時代でも、研究者の道は茨の道である。しかし、それでいいではないか。辛い苦しい道だからこそ、喜びもまた大きい。居直ることだ。それが中国学研究者の道——それは昔もそうだったのだ。昔は良かったなどというのは嘘。研究者はいつの時代でも茨の道——それでいいではないか、自分が志した道であるならば、歓喜も苦難も、ともに在ってこそである。